

2022 年度日本マレーシア学会(JAMS)研究大会 シンポジウム・個別報告要旨

シンポジウム

葛藤するマレーシアの教育—国民統合とグローバルな競争

シンポジウム趣旨

マレーシアは、マレー人、華人、インド人を主要エスニックグループとする多民族社会であり、教育を通じた国民統合が 1957 年の建国以来、一貫して課題とされてきた。一方、1990 年代以降のグローバル化に伴う国際社会の競争とそれへの対応および戦略も重要な政策上の観点となっている。折しもマレーシアでは 2022 年 11 月に総選挙が行われ新政権が誕生した。本シンポジウムでは初等・中等教育と高等教育におけるそれぞれの国民統合とグローバルな競争の相克をみたと、大学に焦点をあて教育現場の実態をとりあげ、政治や経済及び社会変容のなかで相異なる 2 つのベクトルが交差するマレーシアの教育の葛藤を論じる。

シンポジウム報告1

教育制度からみる民族関係

畠川憲之(近畿大学)

本報告では、1)初等・中等教育制度の変容、2)民族政治の教育制度変容への影響、3)教育制度の民族関係への影響について解説をおこなう。

マレーシアの教育制度の特徴は、初等教育がマレー語・華語・タミル語それぞれを使用言語に持つ 3 つの型に分かれていること、中等教育において 3 つの型がマレー語に一本化されることにある。独立以降、教育制度の大きな変容は見られないが、型として現れない変化(1961 年、1996 年教育法の比較より)が多く見られる。こうした変化はどのような背景のもとに生じたのか、主に民族政治がどのような影響を与えてきたのか解説を行う。

初等教育は民族アイデンティティの形成・強化の場であり、現在の初等教育制度が民族関係の改善を妨げる一因であると言われている。しかしながら、初等教育制度の一本化が現実的な選択ではないことも明らかである。そこで、民族間交流政策(主に RIMUP)に焦点を当て、初等教育制度を維持した中での民族関係改善の可能性、課題について解説を行う。

シンポジウム報告2

グローバル化時代におけるマレーシア高等教育の拡大と国際化—私立高等教育を中心に

我妻鉄也(千葉大学)

マレーシアでは、1996 年に私立高等教育機関法が制定されたことにより、学位授与権を有する、私立大学、大学カレッジ(私立)、外国大学分校の設置が可能となった。当時、マレーシアの高等教育システムは公立セクターが中心であり、私立セクターは公立セクターの周辺を形成していた。

しかしながら、2000 年代以降、私立セクターの規模は拡大し、高等教育機関在籍者数の4割が私立セクターであるなど、現在では公立セクターを補完するとともに量的に匹敵する「私立補完型」の高等教育システムが形成されている。

このように、マレーシアにおける高等教育拡大における私立セクターが担った役割は大きいと言えるが、さらには、外国人留学生の受入れや世界大学ランキングへの掲載といった、高等教育の国際化という点においても一定の役割を担っている。

本発表では、マレーシア高等教育の規模拡大や国際化に関して、私立セクターが担った役割という観点から報告する。

シンポジウム報告3

マレーシアの国立大学のジレンマ—マラヤ大学と日本との関わりを例に

木村かおり(マラヤ大学)

本発表では、マレーシアの東方政策下のマラヤ大学の日本語教育を中心にマレーシアの高等教育の国際化とジレンマ、そこにある矛盾を見ていきたい。1980 年代のマレーシアには、国立大学は 7 校のみで、学位を授与できる私立の高等教育機関もほとんどなく、マレーシアは当時、留学生の送出し大国であった。そのため、マレーシアでは高等教育の機会を学生の自助努力による留学と政府奨学金の支給による留学によって補っていた。その中で提唱された東方政策は、日本への留学の機会を大きく広げた。一方で、日本留学という送り出し政策を実施するための教員不足、専門家不足という問題が生じた。ところが、マレーシア国内では送り出しに関する問題に対処することもなく、2000 年代には、国立大学数、学部数を増やし、留学生の受け入れ拡大に舵を切り始める。受け入れ拡大の流れに乗らんとする国立の総合大学であるマラヤ大学は、留学生、国際教員の獲得を進め、大学世界ランキング順位を更新し続け、2019 年には第 100 位以内に入った。大学は、世界ランキングを 1 つの国際化の指標と考えているが、国際化という数字を作りだすために、突然、切り捨てられた文系の教育の現場もある。今後、マラヤ大学の文系教育はどこへ向かうのか。

個別報告

個別報告1

英領期クアラルンプールにおけるセランゴール中華大会堂の設立過程に見る華人社会とイギリス政庁の関係

黄穎康(創価大学大学院)

英領マラヤ華人社会の形成と発展過程において中華大会堂は、様々な出自を持つ華人の団体を包括的にまとめることを志向し、華人社会の最高機構として設立されたと述べられてきた。イギリス植民地政庁は、華人社会の秩序維持と紛争調整調停のために 1881 年にペナンの華人公会堂と、1913 年にベントンの中華大会堂の設立を支援したことがあった。しかし、セランゴールのクアラルンプールでは、1905 年に華人リーダーたちが自らペナンにならって華人公会堂の設立を提案し、1923 年に中華大会堂の設立委員会の立ち上げによる建設が本格化されたが、記念講堂の命名争いなどによる建設の集金活動が断ち切れ、工事中断を余儀なくされた。その後土地問題をめぐるイギリス政庁の介入と支援によって中華大会堂はついに 1934 年に落成され、スルタンによる開幕式が行われた。この設立過程について先行研究では、華人社会の組織化と団結の証だと述べられてきたが、華人社会の実態とイギリス政庁の意思について十分に検討されていない。そこで本報告では、セランゴール中華大会堂の設立過程に焦点を当て、植民地統治における中華大会堂の立ち位置と役割を明らかにし、華人リーダー層とイギリス政庁の関係を検討する。

個別報告2

宙吊りの時間と水かきのついた賜わりもの—マレーシア華語文学に描かれる改宗

及川茜(JAMS 会員)

マレーシア華語文学に描かれる改宗をめぐり、イスラームへの改宗とイスラームからの離脱、また改宗しない華人とマレー・ムスリムのカップルの三通りの例を挙げて考察する。

黄錦樹の「我が友アブドラ」を始めとする一連の小説では、イスラームへの改宗が即ちマレー化を意味し、華人性から強制的に遠ざけられるさまが描かれる。賀淑芳の〈アミナ〉シリーズは、イスラームからの離脱を試みる、華人家庭に育った少女を主人公にした連作小説である。アミナと美蘭という二つの名を持つ主人公はイスラーム・リハビリテーションセンターに送られるが、繰り返し教育期間が延長され、先の見えない時間の中に宙吊りにされる。

他方、同志文学(LGBT 文学)の中にはマレー・ムスリム男性と華人男性の恋愛や性愛を描いた小説が見られる。同性婚が法的に不可能であるために改宗の必要もないが、その代わりどちらかが法律婚に足を踏み入れるまでの暫定的な関係に限られる。

これらの例を通じ、ムスリムであることと華人であることがいずれも制度的な側面から焦点化されていることを示した上、中国を含む他地域の華語文学に見られる華人(漢人)とムスリムとの関係も参照しつつ、華語文学全体の中にマレーシア華語文学が開拓してきた領域の位置づけを試みる。

個別報告3

増田幸一郎と北清事変—『日英組』を中心として

都築一子(NPO シニアボランティア経験を活かす会)

増田幸一郎は、英領北ボルネオで活躍した実業家であるが、1910 年の在バタビア染谷成章領事の報告書に基づく先行研究が多く、あまり経歴が明らかにされていない。報告者は、外務省の旅券下付表で増田が 1900 年 7 月に「日英組の酒保」として清国行きに旅券を下付されているのを見出した。北清事変に、日本が外国軍のために軍夫を送り出したことは周知のとおりである。『日英組』は、約 500 名の日本人を英国軍のために募集し送り出した。当時神戸で製靴会社の役員をしていた増田は、『日英組』を通して英国軍に雇用されたのではなく、『日英組』のメンバーだった。1901 年の日英同盟の頃に、増田は、事業を起こすために英領北ボルネオに渡航した。なぜ、増田が、英領北ボルネオ政庁の信用を獲得できたのか。それは、増田が「日英組の酒保」として英国軍に協力したからである。本発表は、増田と英領北ボルネオを結び付けた『日英組』を明らかにするのが目的である。

個別報告4

多民族社会のなかのマレー王権

坪井祐司(名桜大学)

本報告は、英領期のマラヤにおけるマレー語言論空間の分析を通じて、マレー性に関する議論の展開およびそこでの王権の位置づけについて再検討することを目的とする。植民地期のマレー語出版活動は、頻繁な相互参照・引用が特徴であり、多様な背景を持つ人物や思想が会う場となった。マレー・ナショナリズムもその相互作用の中から形成されたと考えられる。そこで、1930 年代のマレー語紙『マジュリス』をとりあげ、マレー王権をめぐる言説の展開をたどる。王権は、マレー性の象徴的要素であるが、同時にマレー諸州の主権者でもあり、イギリスの統治も王権を通じて行われた。このため、王権を通じてもたらされる植民地近代性の受容をめぐり、イギリスは王権に介入できるのか、非マレー人は王権の臣民たり得るのかなど、さまざまな議論が交わされた。その議論を通じて、マレー人と他者との関係性およびマラヤの多民族社会について、再考してみたい。

個別報告5

20 世紀前半のペナンにおける大衆芸能ボリアの展開

山本博之(京都大学)

シーア派イマームの非業の死を悲しみ嘆く悲劇的な祭礼であるムハッラム祭は、インド経由でペナンにもたらされた後、19 世紀末までにジャウィ・プカンがムハッラム月に楽団を結成して近隣の家々をまわって演奏・演技する大衆芸能ボリアへと変容した。競合する楽団どうしの喧嘩が絶えなかったためにボリア廃止論が唱えられたものの、民衆の人気に支えられて生き残り、1940 年代にはペナンにおけるマレー・ナショナリズムの象徴とみなされるまでになった。本報告では、外来のものと見られていたボリアがマレー人の伝統芸能と見られるようになった過程を跡付けることを通じて、

ウィリアム・ロフに代表される従来のマレー・ナショナリズム研究がシンガポールの視点を通してマレー・ナショナリズムを捉えていたことを批判的に検討し、多様な視点から捉えるマレー・ナショナリズム研究の可能性を議論したい。